



Title	ヴィッテ蔵相期ロシアのジャーナリズムと中国問題： 『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』と『ヨーロッパ通報』の 論調を中心として
Author(s)	竹中, 浩
Citation	阪大法学. 2018, 67(6), p. 1-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87056
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヴィツテ蔵相期ロシアのジャーナリズムと中国問題

——『フーヴォエ・ヴレーミヤ』と『ヨーロッパ通報』の

論調を中心として——

竹 中 浩

一 はじめに

一八九〇年代、ロシアを取り巻くヨーロッパの国際関係は複雑であった。ロシアはイギリスとの間に長く紛争の火種を抱えていた。一八六〇年代、中央アジアに領土を拡大したロシアは、インドを領有するイギリスにとって徐々に脅威を与えるようになり、重要な緩衝国としてのアフガニスタンやペルシアに対する影響をめぐる両国の対立は厳しさを増す。第二次アフガン戦争によってアフガニスタンを保護国化したイギリスとロシアの間に生じたパَنْジエ国境紛争のために、一八八五年春、両国は戦争の一手手前まで行った。⁽¹⁾

他方、露土戦争後にベルリン会議を主催してロシアが得ていた成果の多くを失わせ、バルカンをめぐる対立するオーストリアと同盟関係にあったドイツに対しても、ロシアには根深い警戒心があった。アレクサンドル三世はデンマーク出身の皇后とともにドイツへの強い不信感をもち、外相ギールスの勧めにも関わらず、一八八七年には、

一八八一年に締結された三帝同盟の更新を認めなかった。一八八八年のヴィルヘルム二世即位以後、露独関係はいつそう悪化し、ビスマルクの努力によって辛うじて結ばれた再保障条約も、一八九〇年には更新されなかった。一八九二年から本格的に始まる関税戦争は露独間の緊張をいつそう高めた。

それにもかかわらず、一八九〇年代前半の東アジアにおいては、なおヨーロッパ諸国の間に深刻な利害対立は存在していなかった。早くから東アジアに関わっていたイギリスは、長江流域を中心とする清の南部に権益をもち、李鴻章らはイギリスによる経済支配の拡大を抑制することに努めていた。しかし、長江以北においてイギリスの利権と呼べるものはなお「閩内外鐵路」建設への関与等に限られており、清の北部に関心をもつロシアとの間で棲み分けが可能であるときなされていた。一八八五年から一九〇二年までの間に三度イギリス首相を務めたソールズベリ卿は、中国はすべての列強に十分なビジネスチャンスを与えるものであり、そこで生じる問題は外交で解決可能であると考えていた。対立が生じるとしても遠い将来のことであって、緊急の対応を要するものではないとされたのである。⁽³⁾

こうしたことから、アレクサンドル三世の時代には、東アジアの問題はそれほどロシアのメディアの関心を惹いてはいなかった。対外政策において、主たる関心はなお近東などを舞台としたヨーロッパの国際関係に向けられており、そこでロシアの威信と利益をどのように守るかが重視されていた。

ニコライ二世の時代になると、日本の登場により、東アジアという地域が、政府のみならずジャーナリズムで活動する人々の視野にも入ってくる。もつとも、政治の中心から遠く、政府の方針も確立していない東アジアの問題に関して、メディアの方向性ははじめから定まっていたわけではない。たとえば、穏健リベラルの雑誌として長い歴史と権威をもつ雑誌『ヨーロッパ通報』と、一八九六年に編集者となった右翼の言論人B・A・グリーンングムト

編集の新聞『モスクワ報知』は、内政問題については激しく対立していたが、東アジア政策に関する論調にはそれほど明確な違いはなく、むしろそれぞれがとるべき立場を模索していたといえよう。

そのなかで目を惹くのが、清に対して友好的な態度をとり、その解体を防ごうという立場であり、A・C・スヴォーリンやE・E・ウフトムスキーによって代表される⁽⁴⁾。本稿では主としてスヴォーリンの編集・発行した新聞『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』に注目し、M・M・スタスユレーヴィチ編集の『ヨーロッパ通報』などと比較しつつ、一八九〇年代後半ロシアのジャーナリズムにおける東アジア問題の取り上げ方を検討する。ヴィットが蔵相を務めた時期における東アジア情勢の推移を追いながら、この地域に関する欧米列強の動きとジャーナリズムの論調との関わりを明らかにするのが本稿の目的である⁽⁵⁾。

スヴォーリンやウフトムスキーはともに西欧に対して清の側に立つことをロシアの国益と考えた。その背景には、ロシアの保守的ジャーナリズムに共通する、ヨーロッパとロシアを区別する発想があった。かつて汎スラヴ主義の思想家H・Я・ダニレーフスキーは、一八六七年に刊行された『ロシアとヨーロッパ』で、ヨーロッパにスラヴ世界を対置することによってその普遍性を否定した。保守派ジャーナリズムの清に対する好意的態度は、この系譜の思想がそこで力をもっていたことと無関係ではないであろう⁽⁶⁾。

東アジアにおける対外関係に関する彼らの立場は、一八九〇年代後半、清に対して経済的手段による平和的浸透政策を推進したヴィットと通じ合うところがあった。しかし、ヴィットといえども初めから経済的浸透を清に対する基本政策としていたわけではない。そのことは、ブリヤート人П・А・バドマーエフに対する彼の肩入れに見ることができ、一八九三年に退職するまで、十七年にわたって外務省のアジア局に勤務するとともに⁽⁷⁾、チベット医学を修め、ペテルブルクで医療活動を行っていたバドマーエフは、一八九三年二月、当時は友人であったウフトム

スキーを通じて、前年の八月蔵相に就任したヴィッテに意見書を提出し、その中で、モンゴル人やチベット人だけでなく西部や西部の漢人の心も清朝から離れ、ロシアの庇護を求めていると主張した。もし彼らが戦略的にきわめて重要な蘭州に集まるようになれば、この町は清朝に対する蜂起の拠点となる。それによって清朝の力による支配は倒壊し、チベットやモンゴルは自発的にツァーリの支配を受け入れるようになるであろう。そのためには建設中のシベリア横断鉄道を、ザバイカルからゴビ砂漠経由で蘭州まで延伸させるべきであるとバドマーエフは論じた⁽⁸⁾。

ヴィッテはこの企てがうまくいけばロシアの得になり、失敗しても失うものはないと考えた。満洲横断鉄道の敷設が現実化する前だったこともあり、政府が直接関わることなく実施するという条件で、これを支持する意見を付してアレクサンドル三世に提出した。しかし、アレクサンドルはこの案を空想的として斥けた。アレクサンドルは外交に関しては慎重であり、安易にイギリスと事を構えることを欲しなかった。清の解体リスクを高めることによる国際関係の不安定化や緊張は、彼の望むところではなかったのである。

アレクサンドルに提出した意見において、ヴィッテもまた、アジアにおけるロシアの役割に対するスラヴ主義的な主張を展開している⁽⁹⁾。ただし、このときのヴィッテは、後のスヴォーリンやウフトムスキーのように、ロシアと清朝を結びつけることはなかった。彼はバドマーエフの意見に従って清朝を脆弱なものとし、西欧（特にイギリス）とロシアの対立において、清朝を西欧の側に位置づけていたのである⁽¹⁰⁾。

アレクサンドル三世が世を去る三か月前、一八九四年七月に始まった日清戦争は、大方の予想をはるかに超える日本の大勝に終わった。老大国清との戦争における新興国日本の勝利はロシアにとつて衝撃であった。新しいパワーとしての日本の表舞台への登場は、アジア人にも西欧文明の模倣による近代化が可能であることを欧米に示すとともに、列強に東アジア政策の見直しを迫った。ロシアもまた、日清関係の将来をどう見るか、それに伴って露

清關係を軸とするこれまでの伝統的な東アジア像をどのように修正するかという問題を突きつけられたのである。一八六〇年代以来、隣国として朝鮮と関わりをもってきたロシアは、イギリスに先を越されないように、朝鮮をめぐる問題の解決においても主導的な役割を果たさなければならなかった⁽¹¹⁾。

日本という新しい力の出現が持つ意味を、とりわけ重く受け止めたのがスヴォーリンである。スヴォーリンの見るところ、日清戦争において、旧い指導層の下にある清は戦う意欲をもたず、トルストイの理想に従うかのように殆ど無抵抗の状態であった。日本はそんなことにはお構いなしに攻撃を加え、勝利したのである⁽¹²⁾。日本という新しい国、黄色人種にして初めてヨーロッパ型の政府をもった、ロシアにとつて敵になるやも知れぬ国の登場に対して、彼は強い関心を示した。それは十八世紀のヨーロッパ世界にロシアが登場したときに似ているが、日本は自らの古い文化の助けによって、ロシアよりも速く進むであろう。建設中のシベリア鉄道も、かつては想像もされなかった政治的役割を期待されるようになった⁽¹⁴⁾。

ウフトムスキーも国権主義的傾向の強い『モスクワ報知』に寄稿し、最も好ましい隣国である清を支援することこそがロシアの利益になるという立場から、積極的に行動することの必要を説いた⁽¹⁵⁾。日本は警戒すべき相手であり、その脅威に備える必要がある。しかしそれ以上に、ウフトムスキーは基本的に英露対立という文脈で捉えた。ロシアは東アジアをイギリスの思うままにさせるわけにはいかないとこの頃、ウフトムスキーはヴィットに近い立場にあり、ヴィットの主導のもとで一八九六年一月九日に開業した露清銀行の総裁となる。また、同年、ウフトムスキーは長い歴史をもつ新聞『Санкт-Петербургские ведомости』の発行に当たるようになる⁽¹⁶⁾。

日清戦争における日本の勝利は、スヴォーリンやウフトムスキーをはじめとするロシアの言論人に、東アジアに

おけるロシアの国益を強く意識させた。下関交渉で日本が求めた遼東半島の割譲は、東アジアの国際秩序の根幹に関わる無理な要求であり、ヴィッテが主導して三国干渉により日本に遼東半島を還付させたとき、ロシアのメデアは一致してこれを歓迎した。日本の西洋化に対しては好意的であった『ヨーロッパ通報』も同様であった。三国干渉は、日本に対する牽制と清の現状維持のためのヨーロッパ列強による国際協調として捉えられていたのである。¹⁷⁾

二 租借による中国分割

一八九〇年代、ドイツの皇帝ヴィルヘルム二世は、ドイツの国際的威信を高めて世論の支持を得るため、対外政策において格段に積極的な姿勢をとるようになった。¹⁸⁾その舞台のひとつが、退勢が顕著になっていたオスマン帝国である。一八九四年、帝国内のアナトリア東部ビトリス県で起こったアルメニア人虐殺事件を機に干渉を強めようとする英仏露は、一八九五年一月、オスマン帝国に行政改革を求め、一〇月、アブデュルハミト二世はこれへの署名を余儀なくされた。他方、ドイツ資本は早くからオスマン帝国内の鉄道利権獲得に強い関心を示していたが、一八九八年、バグダード鉄道建設をめぐる列強間の競争が生じ、近東における国際関係の焦点になっていた。

この時期、ドイツは極東にも積極的に関わるようになった。一八九七年七月一六日にロシアを訪問したヴィルヘルム二世は、ペテルゴフでニコライ二世と会談したさい、長崎に代わる冬季の停泊地としてロシア海軍が清から使用許可を得ていた膠州湾の共同使用について打診し、ニコライの了承を得ていた。先帝アレクサンドル三世ほどドイツに対する警戒心をもたないニコライは、ヴィルヘルムにとつて与しやすい相手であった。ヴィルヘルムは通商における露独接近を支持していた。¹⁹⁾

ロシアがドイツに対して認めたのは膠州湾の共同使用だけであった。ところが、十一月一日に山東省の巨野県で

ドイツ人宣教師が殺害されると、それを口実に、同月一日、ドイツ軍は青島砲台を占拠し、膠州湾を占領した⁽²⁰⁾。露独関係は一時緊張したが、深刻な事態にはいたらなかった。ロシアはドイツの行動を黙認し、不問に付した⁽²¹⁾。のみならず、ニコライはツァーリとして自分の考えで動く好機と考え、その意を体したムラヴィヨフ外相は、三国干渉によって日本から返還された遼東半島の先端にある旅順・大連の二五年租借案を出す。当初ヴィットはこれに反対であった⁽²²⁾。ドイツに続きロシアも清国領土の一部を獲得することによって、同様の動きが他の列強の間に広がれば、清の統合を害することになり、彼の平和的浸透戦略の前提としての友好的な露清関係、さらには清国による主権の維持と安定が脅かされると考えたのである。しかしニコライがこの案を支持していることがわかると、これに合わせてヴィットも自分の清への浸透計画を変更せざるを得なくなった⁽²³⁾。

一二月一四日、ニコライ二世は太平洋艦隊の一部に旅順行きを指示し、一五日、ロシア艦隊が旅順港に入る。十分な理由なしに軍事占領という形で既成事実を先行させることに對して、ヴィットは反対であった⁽²⁴⁾。この出来事は、ヴィットによる東アジア政策の独占が終わったことを意味する⁽²⁵⁾。ニコライは武力を行使せずに旅順を獲得したことで大いに満足していた。ニコライの意向を受けて政府内の態度が一致していたこともあり、ロシアのメディアもこれを支持した。ドイツが膠州湾を占領したときに『ペテルブルク報知』で懸念を表明していたウフトムスキーは、ヴィットと同様ムラヴィヨフの案に反対であったが⁽²⁶⁾、この時点でそれを公表することはなかった。

翌一八九八年三月三日、ドイツと清の租借条約調印に先立ち、ロシアは清國に對してムラヴィヨフ案に基づく要求を行い、三月二七日、旅順・大連の二五年租借に加えて、旅順・大連と滿洲横断鉄道の一駅を結ぶ南滿支線の敷設権（必要な場合は鴨綠江の河口にも支線を延ばす）を獲得した。旅順租借についても、ロシアのメディアはひとしくこれを支持した。政治家たちと同様、ロシアのメディアも、三国干渉に続いて旅順租借が行われることが対

日關係においてもつ意味を深刻に考えなかつた。日本の反撥とその影響に対する楽観があつたのである。⁽²⁷⁾

租借は国家間の条約に基づき主権の行使を一定期間他国に譲渡するもので、行政契約による租界や鉄道付属地の設定に比べればはるかに重大な主権の制約になる。それでも『ヨーロッパ通報』は、旅順租借が国際慣行に違反しておらず、完全に正当・合法的なものであり、国民のシヨウヴィニズムを煽るイギリスの一部メディアによる攻撃には根拠がないとした。租借という形は、戦争による領土取得よりずっとましなものである。⁽²⁸⁾特にロシアによる旅順租借は、清が、敵対的な英日から本国を守ることをロシアに求めるための対価である。ドイツにとって膠州湾は本国から遠く離れた土地に過ぎないが、昔から太平洋に足場をもつロシアにとって、鉄道で内地と結ぶことができ、旅順は大きな意義を有するとされた。⁽²⁹⁾

しかし、ことはそれだけではすまなかつた。もともと反露的であつたイギリスの世論は、ドイツの行動よりも、大義名分がなく、単に便乗しただけのロシアの行動に対して批判的であつた。⁽³⁰⁾英露間では事態打開のために協定締結も試みられたが、結局実を結ばなかつた。ロシアに対抗するという口実のもと、イギリスは、軍事的にはさして意味のない威海衛を占領し、七月には、ロシアが旅順・大連を租借している間という条件で、租借した。

従来からの英露の対立に攪乱要因としてのドイツが絡むことで、極東をめぐる国際關係は変化した。最強の経済力をもつがゆえに、清の領土保全と門戸開放、勢力均衡を第一としてきたイギリスは方針を変えつつあつた。もともとロシアに対して宥和的であつたソールズベリ首相は、ドイツとロシアが組まないよう配慮していたが、⁽³¹⁾ここにいたって勢力圏確保において遅れをとることについてのおそれが強まる。社会帝国主義者といわれるジョゼフ・チエンバレン植民地相のもと、長江流域にとどまらず、北部においても影響力の拡大を図ろうとする姿勢が顕著になり、ソールズベリの対露宥和路線は終焉を迎えようとしていた。⁽³²⁾イギリスは中国分割を積極的に止めようとはしな

くなったのである⁽³³⁾。

このような新しい動きに対する評価は、メディアによって異なっていた。それまでほとんど同じであったメディアの立場に、徐々に違いが見られるようになった。最も楽観的であったのは経済界に読者をもつ新聞『ノーヴォスチ・Новости』である。独露がイギリスと敵対するのは有害であり好ましくないが、独露の行動は他の列強からの特別の反応を引き起こさなかった。それによって近い将来国際紛争が起こる様子もない。そうである以上、ロシアもドイツに倣って中国分割に参加すればよいとされた⁽³⁴⁾。また高名な教育家 B・П・オストロゴルスキーの編集する雑誌『神の平安 Мир божий』は、列強は、トルコにおけるのと全く同様に、競い合いながらも共同で解体しつつある清を維持しているのであるとした⁽³⁵⁾。ヨーロッパが協調して東アジアの秩序を安定させることは「白人の責務」であった⁽³⁶⁾。概して親独的であった『ヨーロッパ通報』も、清における国際競争と平和的領土獲得の動きがもたらす結果に対して楽観的であった⁽³⁷⁾。『ヨーロッパ通報』は、トルコと中国におけるヴィルヘルム二世の行動が、ドイツがヨーロッパ第一の軍事大国であるにもかかわらず、米英以上に平和愛好的であり、その利益追求も、紛争を起こさないように配慮しつつなされると考えた⁽³⁸⁾。

正教と専制の絶対護持を掲げるグリーングムトのもとで新たな論調を打ち出したのが『モスクワ報知』である。かつて同紙は、ロシアの行動が他の列強とは異なり、ロシアの平和的・文明的使命によるものだとするウフトムスキーの論文を掲載していた。しかし、今や『モスクワ報知』は、帝国主義的競争へのロシアの参加を認めた。ロシアが不凍港を求めてシベリア鉄道を建設するとき、ヨーロッパ列強がその前に利益を求めるのは予見できたことである。列強による中国分割は如何ともしがたいことであり、ロシアも他の列強と同様躊躇することなく迅速に行動すべきであった⁽³⁹⁾。

列強による日清戦後の新しい関係構築の一環として、『モスクワ報知』はイギリスによる威海衛租借も容認した。それはイギリスが単にひとつの軍港を手に入れたにすぎず、ロシアにとつて恐れるに足りないことであり、山東半島という後背地をもつドイツがこの港を押さえることに比べればずっとましであった。日本がとることはそれ以上に悪い。その場合には広島に加えて威海衛をもつことで日本は黄海全体を勢力下に収めることになるからである。イギリスによる威海衛租借は日本が再度戦争による利益獲得に走ることを抑止するはずであった。⁽⁴⁰⁾

『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』は全く異なる見方をした。同紙はドイツにとつて宣教師殺害や秩序の混乱は占領のための単なる口実であり、そこには当初から膠州、さらには山東半島獲得への意志があったとみており、⁽⁴¹⁾ 中国分割に進む趨勢に対する懸念をはっきりと表明した。中国分割は全国規模で政治的情熱に火をつけ、国内の均衡を壊す。それゆえ、たとえそれがロシアとの国境から遠いところでなされたとしても、ロシアの利益に反する。⁽⁴²⁾ 中国に対し、征服者、搾取者であった他のヨーロッパ列強とは違って、ロシアの関わり方はあくまで友好的なものであり、兄弟として、友としてのそれである。これまでロシアは常に調停者として行動してきた。北京条約も、ウスリー地方という従来に係争地が、英仏との間での仲介の労に対する報いとしてロシアに帰属することになったものである。シベリア鉄道の敷設が進む現在、アジア世界がこれまでのように孤立したままにすることは不可能であり、清の友好国であるロシアは、ヨーロッパの文化や文明を中国に伝える使命を負っている。ロシアにとつては、清国解体のリスクを避け、あくまで中国に最低限の安定を確保することが重要であった。⁽⁴³⁾

この時期、ロシアのメディアにおいては、英露間の対立を軸に中国問題を考える考え方が一般的であり、当時進んでいた康有為や梁啓超らによる戊戌の変法についても、『ヨーロッパ通報』のように、改革そのものに共感する議論はあったものの、⁽⁴⁴⁾ 多くのメディアはこれを英露対立の文脈で捉えていた。⁽⁴⁵⁾ 戊戌の変法は、親露的であるとみな

されていた李鴻章に親英・親日の勢力がとって代ろうとするものであり、これが成功すれば、ロシアの東アジア進出にとって妨げになるだろうと考えられたのである。⁽⁴⁶⁾もともと、外交当局は英露関係の維持に努めており、両国の間では一八九八年の秋から協定締結のための交渉が進んでいた。一八九九年四月、イギリスの駐露大使チャールズ・スコットとロシアのムラヴィヨフ外相は、イギリスは長城の北に、ロシアは長城の南に鉄道利権を求めないことで合意した。⁽⁴⁷⁾しかし、この合意はどちらをも満足させなかった。『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』は、イギリスによる威海衛租借が、明白なロシアの勢力圏に踏み込むもので、従来中央アジアでとってきた緩衝政策の否定であり、ロシアも同様の行動をとるほか、平穩を維持する道はないとした。⁽⁴⁸⁾

さらにこのような東アジアをめぐる国際関係にアメリカが加わり、事態は新たな展開を見せる。アメリカは列強による勢力圏の確保そのものに対して異を唱えた。アメリカにとってアジア太平洋は新たなフロンティアであり、遅れて進出し、未だ現実的な経済的利益をもたない国として、門戸が開放されていることが重要であった。同年八月、イギリスの海軍提督ベレスフォード卿が、『中国の解体 The Breakup of China』と題する著書を出して、対清政策における英米協力を唱えたとき、中国通のアメリカ外交官ウィリアム・ロックヒルは、清の主権を侵害しているのはイギリスもロシアと同様であるとして著者を批判した。⁽⁴⁹⁾ロックヒルは、門戸開放の理念を掲げるべきことを説き、清の主権尊重の統合維持を説いた通牒を起草する。一八九九年九月、マッキンレー大統領のもとで国務長官を務めるジョン・ヘイが、日本を含む六か国にこの通牒を送付して、勢力圏の港湾使用料、鉄道運賃、関税の平等などに付き、同意を求めた。⁽⁵⁰⁾

列強も正面からこれに異を唱えることはできず、イギリスが最初に同意し、他の国も、一定の留保はあったものの、これに追従した。ロシアのみ、対応が遅れた。ヴィットセは、アメリカによる門戸開放の呼びかけに対して、そ

れほど簡単に列強が同意するとは考えず、当面模様眺めの態度をとるべきであるとしていた。

一月十九日、ロックヒルはロシアの駐米大使カシーニを訪問し、賛同を求めた。カシーニは考え方そのものに異論はないとしつつも文書での回答を留保し、本国に指示を求めた。ヴィッテは満洲におけるロシアの優越的地位の維持にこだわった。露曆二月二十六日付けのムラヴィヨフ外相宛書簡で、アメリカ案では勢力圏の範囲が不明確であるとして、満洲横断鉄道と南滿支線の運賃を他国と平等にすることに對しては絶対反対の態度を表明し、また関税徴収について、大連港の特別扱いを求めた。他国が受け入れている以上、ロシアのみ異を唱えることはできないと考えるムラヴィヨフ外相は、消極的態度によつて露米關係に悪影響が生じることを恐れたが、結局ヴィッテの考えが政府内で支持を得、二月三〇日の回答は、その考えが強く反映した、曖昧な内容のものになった。⁽⁵¹⁾

ところがこの通牒は大方の予想を超える反響を呼び、自国の對中国政策の理念を表現したものととして、アメリカの世論に大きな影響を与えたのみならず、イギリスのメディアでも賞賛を得た。これがその後の國際世論を形づくることになったのである。

三 義和団事件

中国情勢に急展開をもたらしたのが、一八九九年に山東半島を発火点として起きた義和団事件である。このとき、哲学者 B・C・ソロヴィヨフは「三つの会話」を書き、義和団事件にヨーロッパのキリスト教文明に迫る悲觀的未来を見た。「汎モンゴル主義」の勝利を予言するソロヴィヨフの議論はロシアの知的社会に強い印象を与え、大きな反響を呼んだ。賛同する『モスクワ報知』は、直ちに列強と協力して秩序の回復を行うべきであると主張した。⁽⁵²⁾

これに対して、もともと清に対して同情的であり、ロシアの立場は他の列強とは異なるという主張をしてきた『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』や『ペテルブルク報知』は、概して被害に遭ったヨーロッパ人に同情するよりもむしろ義和団のほうに理解を示した。⁽⁵³⁾『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』は「中国人のための中国」という論文で、ヨーロッパは密かに抱いている中国分割の意図を捨てたほうがよいと論じた。軍事的に中国を屈服させることはできても、その意に反して統治することは容易でない。西欧が自らの文明を押し付ければすむといった簡単なものではない。中国文化とヨーロッパ文化は根本的に異なるのである。⁽⁵⁴⁾このように論じて、『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』は、あえて火中の栗を拾うことのないよう、ロシア当局に慎重な対応を求めた。中国との関係において、ロシアはヨーロッパとは全く異なる。ロシアは中国と長い陸の国境を有し、長年にわたりよき隣人として付き合ってきた。義和団の鎮圧に加担するようなことになれば、ロシアはこれまで守ってきた伝統から永遠に離れてしまうであろう。しかも、中国は蟻塚のようなものであり、おとなしくしているところに下手に棒を突っ込んでかき回すことは危険である。⁽⁵⁵⁾

一九〇〇年六月二一日、清がロシアを含む八か国に対して宣戦を布告すると、ロシアも戦闘に巻き込まれ、部外者ではいられなくなった。満洲横断鉄道を守るという名目でロシアの正規軍が満洲に侵攻した。七月一五日、清軍のブラゴヴェシチェンスク砲撃があり、それに対する過剰反応として「アムール川の虐殺」が起きる。それでも『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』や『ペテルブルク報知』は慎重な姿勢を崩さなかった。『ペテルブルク報知』は、事件の責任が宣教師やヨーロッパの側にあるとした。宣教師の活動が中国人の体面を傷つけ、中国人の間に分裂を持ち込んだのである。ロシア人は中国人をよりよく理解しており、他のヨーロッパ人に比べて特権的な立場にある。ヨーロッパは中国との間に平和な友好・善隣関係を維持してきたロシアの経験に学ぶべきである。⁽⁵⁶⁾別の論文では、人種や文化、対立する世界観の衝突という考え方に立って中国に西洋の文化を押しつけようとすれば、将来いつそ

う大きな災いを引き起こすであろうとされた⁽⁵⁷⁾。

編集者のウフトムスキーは謙虚なスラヴ・トゥラン世界に傲慢なゲルマン主義を対置するという定型的な問題の立て方を踏襲した。そもそも清がロシアに支持を求め、両者の間に信頼関係ができてきたときに起こったドイツによる膠州湾占領は、「卑劣なチュートン人」がスラヴ人に対してとってきた行動と同じであった⁽⁵⁸⁾。加えて、義和団事件はアジアの緊迫した情勢のなかで起こった。高度な独自の文化をもつアジアは、いざれ自己主張を始めるであろう。賢明な日本人は既に外国人への無条件の従属の危険を悟りつつある⁽⁵⁹⁾。フランスによって派遣された安南人兵士は日本人との接触によってどのような影響を受けるであろうか。イギリスが動員しているインド兵が、インドにおいて不満が高まっているという噂を聞いたとき、そのままどまるであろうか。中国で起こっていることがアジアの他の地域に波及しないはずはないとウフトムスキーは論じた⁽⁶⁰⁾。ヴィッテは、清国政府と列強の間で調停を行おうとしていた李鴻章に協力させるため、彼を上海に派遣した。

『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』も、ロシアに必要なのは中国に、より正確には中国の北半分に平和を回復することだとする。たしかに両岸の文化水準は一樣ではないから、対岸の清国領に関心をもたずにアムール川左岸のロシア領の安全を保障することは難しい。しかし、だからといってそのために無関係の地域まで占領するべきだということにはならない。あくまで必要最小限の範囲を押さえることのみを課題とすべきである。また現在滿洲横断鉄道の建設が進んでおり、その作業継続のために必要な地点に一定の軍事力を配備することは必要であろう。しかし、そのために新たな領土の獲得を考へてはならない。新領土整備のための出費はロシアを弱体化させるであろう。あるいはカフカースや中央アジアと同様に滿洲の領有を夢見る向きがあるかもしれない。しかし、カフカースは七〇年かけて統治のためのシステムを作り出すことによりやっと領有を実現したのであり、中央アジアは滿洲がもたない

政治的意味をもっていた。ロシアの政治的威信はアジアにはなく、ひとえにヨーロッパと近東にかかっている。満洲横断鉄道の敷設が停滞している間に、ドイツはバグダード鉄道の獲得に向けて最後の歩を進めようとしている。⁽⁶¹⁾ 慌てて満洲にのめりこむ前に、やるべきことがたくさんある。

編集者のスヴォーリンは、中国はかつてのロシアと同様だとする。かつてロシアはヨーロッパにとつて謎であり、現在のような強国になるとは予想されていなかった。現在ヨーロッパから嘲られている中国も、どのように変わるかはわからない。他の国民を自分たちの尺度で測るべきではなく、彼ら自身の流儀で生きる権利を尊重すべきである。⁽⁶²⁾ スヴォーリンは、中国の将来を必ずしも暗いものとは考えていなかった。しかし、だからといって中国を恐れるべしという、黄禍論の立場にも立たなかった。

連合軍が北京に向かって進軍しているさなかの八月六日、ヴィルヘルム二世はニコライに、ドイツが義和団によって公使を殺害されていることを理由に、自国のヴァルダーゼー將軍を連合国総司令官として推薦した。⁽⁶³⁾ ドイツに対して同情的であったニコライはこの人事の提案者にさせられてしまい、他の列強も、被害者としての立場を打ち出した君主自らの案を斥けることは儀礼上できなかつた。八月一四日、連合軍が北京攻撃を開始する。二〇日、清国政府はそれまでの態度を変え、義和団を見捨てた。

戦後処理について、メディアの立場は分かれた。スヴォーリンは七月二八日及び三〇日（共に露暦）の『ノーヴオエ・ヴレーミヤ』に掲載した署名記事で、ロシアはアジアの側に立つべきであるとして、ロシアを盟主とし、清とオスマン帝国を加えた三帝国同盟を提案した。これによって地球上の人口の三分の一、ヨーロッパの二倍の人口がロシアの陣営に入ることになる。もちろん三国は対等ではなく、中国やトルコはロシアに従属すべきものと考えられていた。⁽⁶⁴⁾ 西欧列強と戦争状態にある清に加え、一方でアルメニア人虐殺をめぐって欧米世論の非難を浴び、他

方でバグダード鉄道の敷設権をめぐって国際的な関心を引いていたオスマン帝国との同盟を説く彼の提案は物議を醸し、ジャーナリズムの中でも極端な議論として受け止められた。『ノーヴォスチ』は、健康なロシアと病める清やトルコが同盟することの愚を指摘し、清がこれまでどおり存続することは不可能であったとした。同盟するならむしろ日本であった。⁽⁶⁶⁾

こういった議論に答えるため、スヴォーリンは八月、『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』の署名記事で集中的にこの問題を論じ、西欧とは距離をとって、清にいつそう接近すべきであるとした。清とよい関係をもつために、外交官をはじめとして、中国語を習得した人材の育成が必要である。⁽⁶⁶⁾ ロシアは調停者としての役割を果たすことによって、事態を收拾し、鎮静化を促せばよい。重要なのは軍事や植民地化でなく政治的影響力をめぐる争いである。ドイツが連合軍総司令官としてヴァルデーゼーを送り込もうとしていることの意味を考える必要があるとして、アジアとの関係構築に対する柔軟な見方の必要を訴えた。⁽⁶⁷⁾ スヴォーリンは清の現状維持が可能であるという立場に立った。ロシアがロマノフ朝成立以前の動乱の時代から時とともに脱却したように、中国人自身による秩序形成が可能であると考えたのである。⁽⁶⁸⁾

ヨーロッパの国際協調を重んじる人々のなかには、中国文化とヨーロッパ文化の角逐を対立する文明の闘争とみる黄禍論的な見方が強かった。北京解放の直前、黄禍論の代表的論客であったソロヴィヨーフが世を去ると、C・H・トルベツコイがその衣鉢を継いで黄禍論を唱えた。本来トルベツコイは穏健なりべラルであり、専制という政治体制に対する批判的な姿勢と西欧的な改革への関心をもっていた。その改革とキリスト教は矛盾しない。改革しなければ、近代的なヨーロッパの科学技術で武装したモンゴル人の群れに屈することになる。⁽⁶⁹⁾ 国内問題については穏健なりべラルであるトルベツコイが、東アジア政策においてはきわめてヨーロッパ中心主義的な立場に立ったの

である。

トルベツコイの立場に最も近いのは『ヨーロッパ通報』であった。『ヨーロッパ通報』は、列強による統一行動の実現を評価し、日本と結ぼうとするイギリスによる妨害にも拘わらず、列強は相互に接近しつつあるとみていた。司令官としてヴァルダーゼーを受け入れたのはその表れであった。清におけるドイツの軍事力は小さく、ヴァルダーゼーはヴィルヘルムに近い政治的軍人であって、誇るべき軍功があるわけではない。ヴィルヘルムが彼を推薦したのは、清での影響力確保を狙ったためである。それにも拘わらず、フランスも含め、列強はヴァルダーゼーの司令官就任を受け入れた。そこにはドイツによる自国の民族感情の抑制とフランス世論への配慮があった。『ヨーロッパ通報』のみるところ、これは望ましい国際秩序への第一歩であった。⁽⁷⁰⁾

中国問題は始まったばかりである。日本が現在の中国と同様の状態にあったのはそう昔のことではない。短期間に日本が劇的な変化を遂げたように、中国も変わる可能性を秘めている。軍事力を強めた清に対して、ロシアは国境を守らなければならないとして、未来への楽観と日々の問題解決に終始する態度を戒め、清に潜在的脅威を見ることで、『ヨーロッパ通報』はソロヴィヨフの予言に現実的な意味を認めた。清を、もはや独立の未来をもたないトルコと同一視するのは危険であった。⁽⁷¹⁾

国内問題に関してはトルベツコイと立場を異にする『モスクワ報知』は、九月上旬に一連の社説で、ソロヴィヨフやトルベツコイの問題提起に対する自らの立場を表明した。『モスクワ報知』はまず、露清関係は危機に瀕しているとして黄禍論に理解を示し、「平和愛好」を唱えるメディアを批判する。⁽⁷²⁾ただ『モスクワ報知』はソロヴィヨフのベシミズムには反対し、キリスト教的西洋と異教的東洋の闘争の行く末を明るく描いた。その勝者として立ち現れてくるべきは、自らの世界史的使命を自覚したロシアである。⁽⁷³⁾そのように考える『モスクワ報知』にと

って、リベラルなメディアが、黄禍論を援用しつつ、正教や専制をロシアの「内なる中国的精神 *внутренняя китаизация*」として批判するのは許しがたいことであった。⁽⁷⁴⁾

スヴォーリンやウフトムスキーがこのような考え方に与しなかったのは言うまでもない。「ペテルブルク報知」の一九〇〇年八月三十一日号に、黄禍を唱え、それを避けるために中国分割を説くトルベツコイの「編集部への手紙」が掲載されると、スヴォーリンはこれを批判した。トルベツコイの提案する政策はあまりにも失うものが多く、経済的に不合理である。黄色人種の数を恐れる必要はないし、彼らがヨーロッパに攻めてくると考える必要もない。黄色人種とうまくやるほうがロシアにとってはるかに有益である。⁽⁷⁵⁾ 中国分割論に対しては、スヴォーリンは絶対反対であった。ポーランド分割から百年経ってもポーランド人はドイツ人ともロシア人とも融合していない。分割が問題の解決になるとは、スヴォーリンは考えなかった。内政問題に関してはトルベツコイと立場が近い『ペテルブルク報知』も、トルベツコイの中国分割論を批判する論文を掲載した。著者は、中国を分割したら、ロシアは中国の代わりに複数の隣国をもつことになる。そのひとつひとつは中国ほど危険でないにしても、少なくともそうした状態はいっそう厄介であると説いた。⁽⁷⁶⁾

四 英独協定とロシアによる満洲占領

一九〇〇年八月の北京解放後、実際に問題となったのはもはや中国分割や領土獲得でなく、清国内における安定した秩序の確立であり、義和団事件のような出来事の再発防止であった。それに対する考え方をめぐって、列強の間には不協和音が目立つようになった。ドイツは報復を最優先し、これから中国をどうするかといった問題には関心を示そうとしなかった。イギリスもドイツに与した。両国は、皇太子の父にして西太后の側近であった載漪をは

はじめとする義和団事件の責任者が処罰されない限り、清国政府と講和交渉を開始することはできないとした。

『ヨーロッパ通報』はこの主張に異議を唱える。命令に従って愛国的義務を履行した独立国の政治家や臣民の引渡しを求めるのは国際法に反する。ドイツの案は、清に国際法を適用することの不可能を前提としており、清国人を野蛮人扱いするものである。異人種の国民に対してこのように自覚的に侮辱を加えることほど、極東に平和と安定をもたらすうえで不適当なやり方はない。事件の責任者とされる人々は清国政府を代表し、また西洋人に対する一般民衆の抜きがたい敵意を代弁する人々である。民衆に人気の高い彼らを厳罰に処するならば、民衆の間に外国人に対する新たな憤激を引き起こし、消えかかった火を再燃させ、西洋に対して友好的な政策をとることを不可能にするであろう。ドイツ案はきわめて近視眼的で、事件の表層しか見えていないとされた。⁽⁷⁸⁾ここにいたって『ヨーロッパ通報』はヨーロッパ列強への協調路線からいくぶん距離をとり、清との平和を重視する『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』の立場に接近した。

それでも『ヨーロッパ通報』には依然として黄禍論の名残があった。民衆の間にある根深い反西洋感情を強めることは、やがて中国が西洋を範とした軍備を有するにいたったとき、その災厄をいっそう大きくするであろうという危惧が、『ヨーロッパ通報』にはあった。⁽⁷⁹⁾これは『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』には見られない発想であった。また、『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』に比べ、『ヨーロッパ通報』は、イギリスに対するほど厳しくドイツを批判することとはしなかった。『ヨーロッパ通報』にはなお、ヨーロッパが連帯して中国に対することへの期待が残っていたのである。

これを打ち砕いたのが英独の協定である。一〇月一六日、英独はロンドンで、門戸開放の理念を支持する協定に署名した。⁽⁸⁰⁾秘密裏に準備された英独協定は、ロシアをはじめ、他の列強にとって衝撃であった。『ヨーロッパ通

『報』は英独協定によって八か国の共同行動という幻想が最終的に崩れたとした⁽⁸¹⁾。その後始まった清との交渉においても、列強間に立場の違いが顕在化した。厳しい報復を求める英独とは異なり、アメリカは清に対して過度に厳しい要求を行うことに反対した⁽⁸²⁾。これにロシアとフランスが追隨して、列強が二つに分かれることになった⁽⁸³⁾。

この協定で、英独両国は、それぞれの勢力圏において沿岸・河川の航行及び通商自由の原則をとるとともに、清において領土を求めず、帝国の一体性を保全すべく努めることを約した。ロシアの経済の弱さを自覚していたスヴェーデンは、中国における門戸開放提案には否定的であった。門戸開放政策は、ヨーロッパで商工業が最も発展しているイギリスとドイツにとって利益になる。両国は他国もこれに倣うことを求めているが、それはロシアの勢力圏においても英独の経済的支配を許すことになり、競争力の弱いロシアの商業に損失をもたらす。他のヨーロッパ諸国は、ロシアのように、中国人をはじめとするアジア人と平和に暮らす能力をもたないから、他の国々がロシアの勢力圏に入ってくれば、混乱が生じることは避け難い。中国の南部や中央部は他国の好きなようにさせたらよいが、北部に関する門戸開放はできないとスヴェーデンは主張した⁽⁸⁴⁾。

しかしながら、清にとってはロシアも好ましい隣人とは言い難かった。満洲に建設中の、二〇〇〇キロメートルに及ぶ鉄道の防衛を目的として、一九〇〇年七月、満洲に侵攻したロシア軍は、八月末に黒龍江省域を、九月下旬に吉林省域を、一〇月初めに奉天を占領していた。第三国が清において領土を求めようとするとき、各々は自らの利益を守る権利を留保するとした英独協定の第三項は、ロシアの満洲占領を念頭に置き、暗にそれを批判するものであった。

満洲全土を征圧したロシア軍は、十一月一日、奉天の盛京將軍増祺と秘密協定を結び、ロシア軍の駐留を認めさせた。この報が北京に届くと、宮廷は承認を拒み、李鴻章も反撥した⁽⁸⁵⁾。一九〇一年一月三日、イギリスの『タイ

ムズ』紙が秘密協定を暴露し、ロシアは国際的な批判を浴びる。一月四日、露清間で交渉が開始されたが、成果を見ることはなかった。⁽⁸⁶⁾『タイムズ』は三月一四日号で、ロシアが満洲を切り離し、個別交渉を行っていることを非難した。⁽⁸⁷⁾

ロシアのジャーナリズムには、露清関係についてさまざまな議論が現れた。⁽⁸⁸⁾『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』は、ロシアは隣国清との間に長い国境を有しており、今回ブラゴヴェシチェンスクで起きたような予期せぬ攻撃から国境を防衛する必要があると論じた。両国「政府」の条約によって敷設されつつある満洲横断鉄道についても同様である。そのためにロシアが清の地方当局と個別の協定を結んだことを清の領土の全一性に対する侵害であるかのように言い立てるのは不当であるとした。⁽⁸⁹⁾

『ヨーロッパ通報』もロシアの行動を弁護した。露清間に起こったのは宣戦布告を伴った戦争であり、戦時に交戦国の領土を一時占領することは国際法に適っている。そもそも今回のロシアの軍事行動は、準備のできていないプリアムールが義和団でなく清国軍によって攻撃を受けたことに対する反撃として始まったのであり、ブラゴヴェシチェンスクで起こった虐殺も、部分的にはそれによって説明される。ロシアには満洲を領有する意図などはない。領有すれば、ロシアは大きな財政的負担とともに、新たに複雑な課題を抱え込むことになるからである。治安が回復されれば、ロシアは直ちに占領地を清に返還するであろう。⁽⁹⁰⁾

『ヨーロッパ通報』は一貫して、ロシアの満洲占領が清国軍による攻撃に対する反撃としてやむを得ずなされたものであり、ロシアの置かれた状況は、他の列強とは全く異なるという立場をとった。⁽⁹¹⁾また、英独を切り離し、ロシアの満洲での行動に関心をもつのがイギリス（及び日本）のみであることを示そうとした。⁽⁹²⁾その一方で、イギリスの新聞が満洲問題におけるロシア外交の失敗を書き立てていることについて、『ヨーロッパ通報』は、広報戦略

の面からロシアの外交当局に苦言を呈している。ロシアが多弁を弄して清との友好を語り戦争を否定する一方で、正確な協定文を示さなかったために、逆に疑いを深め、イギリスを利する結果になったのである。⁽⁹³⁾

『ヨーロッパ通報』によれば、最近の出来事は、時の清国政府の合意だけを頼りに、中国のようなあてにならぬ国に鉄道を建設することのリスクについて、当事者さえもよく理解していなかったことを明らかにした。残念ながら、今となつては、鉄道を全面的に放棄するのではない限り、満洲から完全に手を引くことはできない。しかしそうだとしても、満洲との関りは、鉄道を支障なく利用するのに必要な最小限の範囲に限定すべきである。⁽⁹⁴⁾

一九〇二年一月、日英間に同盟が結ばれた。この出来事はロシアのメディアを驚かせた。『ヨーロッパ通報』の見たところ、この同盟条約は新興国日本にとって大成功である。イギリスは光榮ある孤立を捨てて日本に対し軍事的義務を負った。両国は、清と朝鮮の不可侵を条約の目的に掲げているが、かつて朝鮮の独立を脅かしたのは清と日本であり、清の不可侵を脅かしたのはイギリスと日本であった。今やそのような国はなく、その防衛を理由とした同盟は不要のほゞである。この条約は、同じく清の不可侵を謳い、しばらく大騒ぎした後、忘れ去られてしまった、一九〇〇年の英独協定を想起させるとされた。⁽⁹⁵⁾ 中国分割の先鞭をつけたイギリスと日本が、今や中国の不可侵を政治的ドグマにしている。これに対しては、露仏も関係を強化して対応する必要がある。⁽⁹⁶⁾

このような『ヨーロッパ通報』の立場からすると、三月一八日の『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』が、反独姿勢を貫こうとするあまり、バグダード鉄道への参加をめぐる、フランスのデルカッセ外相に対する同国ナシヨナリストの攻撃に同調しているのは解せないことであつた。⁽⁹⁷⁾ 外国では、ロシアのメディアは政府に言われたとおりを書いていると思われており、まして『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』はどういうわけか半官報のように見られている。露仏同盟を強化しなければならぬときに、ロシアの新聞にフランス政府に対する攻撃が載るのは好ましいことではない。⁽⁹⁸⁾

一九〇二年三月二十六日（露曆）、ロシアは清との間で協定を結び、翌年の九月二六日まで、三段階に分けて撤兵することを約束した。⁽⁹⁹⁾ 海外のメディアはこれが日英同盟の圧力によるものであるとした。『ヨーロッパ通報』は、それが領土獲得の利益にならないことの自覚によるものであるとし、ロシアとしてやるべきことはやったと、肯定的評価を与えた。⁽¹⁰⁰⁾ その成否は、清の出方のみならず、他の列強、特に英日の行動にかかっている。とはいえ、清の国内は不安定であり、排外暴動のおそれがある。撤退が容易でないことは、『ヨーロッパ通報』といえども認めないわけにはいかなかった。⁽¹⁰¹⁾

清との良好な関係を維持しようとしたヴィットテも、結局は清からできるだけ譲歩を引き出そうとした。ヴィットテは必ずしも信念の人ではなかったのである。違いはもはや強硬さの程度の差にすぎなくなっていた。ロシアは一九〇二年一〇月八日に第一期の撤兵を行ったのみで、駐兵を継続した。秋に極東を旅行したヴィットテは、それまでの積極的な経済的浸透政策を諦め、満洲横断鉄道付属地への植民政策を積極化させる方針に転換した。

東アジアにおいて守るべきものを抱え込んでしまったロシアは、門戸開放を標榜しつつ、清に対して共同で後見を行おうという列強の流れに同調できなかつた。ロシアと他のヨーロッパ列強のどちらが清に対して苛酷であったかということとは無関係に、ロシアは国際社会において浮き上がってしまった。満洲と朝鮮をめぐる対立を深める日露の間で、列強は模様眺めの姿勢をとり、どちらに対しても積極的な加担はしなかつた。それでも、日本と同盟を結んだイギリスはもとより、満洲において日英と共同歩調をとりつつあったアメリカからも、好意の眼差しが向けられたのは日本に対してであった。

ヴィットテは、露清銀行と滿洲横断鉄道によって、ロシアが清における経済的利益を拡大することを目指した。しかし、経済のみで英独に対抗するには、ロシアの力は弱すぎた。販売すべき商品も供与すべき資本も欠くロシアが中国で利益を上げるとすれば鉄道事業のほかはない。鉄道利権が重要になればなるほど、それは付属地の確保と不可分になり、守るには軍事力が必要になる。滿洲横断鉄道の保全を国家の威信と結びつけてしまった以上、ロシアには安易な撤退はできなかった。一旦東アジアにおいて国家の威信が争点化すると、経済的合理性の論理だけで十分な政治力を確保することは難しい。⁽¹⁰⁾ ヴィットテの見通しは甘かったといわざるを得ない。

一九〇三年八月、ヴィットテが蔵相を解任され、中央政治の表舞台からの退場を余儀なくされたとき、スヴォーリンは『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』紙上にヴィットテの人物評を記した。ヴィットテの能力と仕事を高く評価する一方で、スヴォーリンは、実務的能力に恵まれたロシア人の通弊として、ヴィットテが、思索を広げ、深める余裕をもたなかったとした。そのためヴィットテの仕事はしばしば物事の実務的処理にとどまった。実務的処理はときとして現実の多様な分野間の、たとえば工業と農業の間の、強固な結びつきを見ようとならない。政治家には、財政に関心を限定せず、鉄道や商工業だけでなく全体に目を向けることが求められる。ヴィットテは人民の困窮に目を向けるのが遅かった。税によって財政を支える人民が休息を必要としているにも拘わらず、それに対する政治的配慮が十分ではなかったことを、スヴォーリンは指摘している。⁽¹⁰⁾

スヴォーリンのみるところ、ヴィットテが前のめりになり、極東に過度の比重をかけるのは、ロシア全体の利益にとって危険なことであった。それはロシアが抱える問題の根本的解決には役立たないと考えられたからである。⁽¹⁰⁾ ま

た、ヴィッテが、新聞というメディアや言論人に対して十分な敬意を払わないことに対して、スヴォーリンは快く思っていなかった。⁽¹⁶⁾ それでも、ヴィッテの政策の結果として、満洲という地域がロシアの威信と固く結びついてしまったとき、スヴォーリンのように視野の広いジャーナリストにとってさえ、とりうる言論の幅はきわめて狭いものならざるを得なかった。その点では、『ヨーロッパ通報』のような比較的冷静なメディアも同じであった。ゼムストヴォの果たすべき役割の問題をめぐって『モスクワ報知』と『ヨーロッパ通報』の間に生じたような激しい論争は、そこには生じなかった。それは、必ずしも政府の統制によるものではなく、当時のロシアが置かれた状況を踏まえつつ展開することの可能な政策の幅の狭さがもたらした結果だったのである。

東アジアとロシアとの関わりという問題は、ヴィッテのような政治家にも、スヴォーリンのような言論人にも、内政をも含めたロシアのアイデンティティを考えるにあたり、思想的に重要な意味をもちうるはずのものであった。それが十分な深化を遂げないうちに日露戦争が起き、滅びゆく清に代わって、日本を標的とする黄禍論が勢いを増すことになる。それはもはや、アジアとヨーロッパという対比のどこにロシアを位置づけるかということとは質的に異なる問題であった。

- (1) 本稿では、ロシアにおいて起こった出来事については露暦を、国外において起こった出来事については西暦を用いる。
- (2) 「関内外鉄路」については、Arthur Lewis Rosenbaum, "The Manchuria Bridgehead: Anglo-Russian Rivalry and the Imperial Railways of North China, 1897-1902," *Modern Asian Studies*, vol. 10, no. 1 (1976), pp. 41-42 を参照。
- (3) David Gillard, *The Struggle for Asia, 1828-1914: A Study in British and Russian Imperialism* (Methuen, 1977), pp. 157-158, 166.
- (4) ウフトムスキーは、一八九〇年から翌年にかけて皇太子ニコライの東アジア旅行に随行し、大部の旅行記「Путешествие на Восток его Императорского Высочества государя наследника цесаревича: 1890-1891, тт. 1-3. СПб., 1893-

1897) を書いた人として知られている。伝統的なアジアを美化・肯定した彼は、ロシアとアジアの結びつきを強調し、両者を西欧に対置した。David Schimmelpenninck van der Oye, *Toward the Rising Sun: Russian Ideologies of Empire and the Path to War with Japan* (DeKalb, Ill., 2006), pp. 50-51 を参照。

- (5) 一八九〇年代には李鴻章や伊藤博文もなお政治力を保っており、ヴィッテを加えた三者の相互関係は、東アジアの歴史に大きな影響を与えた。
- (9) Louise McKeown, *The News under Russia's Old Regime: The Development of a Mass-Circulation Press* (Princeton, N.J., 1991), p. 183. 崔惠圭「帝政ロシアのアジア認識と韓人(一八九一―一九一〇)」は、東アジアに共感をもつスラヴ主義に、帝国主義的な西欧主義を対置するという二分法で当時の議論を整理している。この論文は二〇一八年一月五日現在 <http://ywhe.ken-shin.net/futski/pdf/00303.pdf> において公開されている。
- (7) *Единдрухова Н.Е.* Русские в Монголии: основные этапы и формы экономической деятельности (1861-1921 гг.). Иркутск, 2003. С. 123.
- (8) За кулисами парлазма: архив тибетского врача Балмаева. Изд. 2-е. М., 2011. С. 51-52.
- (6) Steven G. Marks, *Road to Power: The Trans-Siberian Railroad and the Colonization of Asian Russia, 1850-1917* (Ithaca, New York, 1991), p. 138.
- (10) バトマーエフの案が成功すれば、ロシアはアジアの諸問題において支配的な地位を得るであろうとされた (Sidney Harave, *Saint Sergei Witte and the Twilight of Imperial Russia: a Biography* (Ammonk, New York, 2004), pp. 55-56)。
- (11) *Сунь Чжинпин.* Китайская политика России в русской публицистике конца XIX - начала XX вв.: "желтая опасность" и "особая миссия" России на Востоке. М., 2005. С. 119.
- (12) Суворин Д.С. Маленькие письма // Новое время. 1895. 11 фев.
- (13) Суворин Д.С. Маленькие письма // Новое время. 1895. 4 марта.
- (14) Суворин Д.С. Маленькие письма // Новое время. 1895. 15 апр.
- (15) Сунь. Указ. соч. С. 122-123.
- (16) Ухтомский Э.Э. Накануне осложнений // Московские ведомости. 1895. 12 апр.

- (17) Сунь. Указ. соч. С. 111, 135.
- (18) Paul M. Kennedy, "German World Policy and the Alliance Negotiations with England, 1897-1900," *The Journal of Modern History*, vol. 45, no. 4 (Dec., 1973), pp. 609.
- (19) Ламздорф В.Н. Дневник: 1894-1896. М., 1991. С. 35.
- (20) ヴェールヘルム二世はニコライ二世の領土に対する関心を知らなかった。Сунь. Указ. соч. С. 174.
- (21) 『ヨーロッパ通報』は、ロシアが、列強の中で特にドイツとの関係維持に対して、必要以上に配慮してきたと論じた(『Inostrannoe obozrenie // Vestnik Evropy. 1897. Sent. С. 353』)。
- (22) 和田春樹『日露戦争―起源と開戦・上』(岩波書店 二〇〇九年) 二五九―二六〇頁。Сунь. Указ. соч. С. 169.
- (23) Измайлов А.В. С.Ю. Витте-дипломат. М., 1989. С. 71.
- (24) Милотин Д.Д. Дневник: 1891-1899. М., 2013. С. 530.
- (25) Дужовио И.В. "Не отстать держав...": Россия на Дальнем Востоке в конце XIX-начале XX вв. СПб., 2008. С. 322-323.
- (26) Сунь. Указ. соч. С. 171-172. Ухтинский Э.Э. К событиям в Китае: об отношении Запада и России к Востоку: рубж XIX-XX веков. СПб., 1900. Изд. 2-е. М., 2011. С. 68-69.
- (27) 和田 前掲書 二〇八―二〇九頁。
- (28) Сунь. Указ. соч. С. 172, 174.
- (29) Inostrannoe obozrenie // Vestnik Evropy. 1898. Apr. С. 843.
- (30) T. G. Ote, "Great Britain, Germany, and the Far-Eastern Crisis of 1897-8," *The English Historical Review*, vol. 110, no. 439 (Nov., 1995), p. 1177-1178.
- (31) Edmund S. Wehrle, *Britain, China and the Antimissionary Riots, 1891-1900* (Minneapolis, Minn., 1966), p. 102; Kennedy, op. cit., p. 613.
- (32) Ote, op. cit., p. 1169.
- (33) Andrew Roberts, *Salsbury: Victorian Titan* (London, 2000), pp. 687-689.
- (34) Сунь. Указ. соч. С. 159, 170-171.

説

論

- (35) За границей // Мир Божий. 1898. Ноя. С. 26.
- (36) 東アジヤとの關係に於けるロシアの自由認識に於てスラヴ主義とヨーロッパ主義の画面があった。S.C.M. Paine, *Imperial Russia: China, Russia, and their Disputed Frontier* (Атлонк, New York, 1996), p. 236.
- (37) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1898. Апр. С. 845-847.
- (38) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1898. Дек. С. 786-787.
- (39) Москва, 16-го марта // Московские ведомости. 1898. 17 марта.
- (40) Москва, 2-го апреля // Московские ведомости. 1898. 3 апр.
- (41) Германия и Китай // Новое время. 1897. 3 дек.
- (42) С.-Петербург, 17-го марта // Новое время. 1898. 18 марта.
- (43) Исторический момент // Новое время. 1898. 18 марта.
- (44) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1899. Янв. С. 389.
- (45) Сунь. Указ. соч. С. 180-181.
- (46) Schimmelfrensch van der Oude, op. cit., pp. 159-160, 171; Сунь. Указ. соч. С. 177-179.
- (47) Дужков. Указ. соч. С. 341; A. E. Campbell, "Great Britain and the United States in the Far East, 1895-1903," *The Historical Journal*, vol. 1, no. 2 (1958), pp. 167-168; Rosenbaum, op. cit., pp. 54-57.
- (48) О соглашениях с Англией // Новое время. 1898. 9 апр.
- (49) Kenneth Wymmel, *William Woodville Rockhill: Sincere-Diplomat of the Tibetan Highlands* (Бангкок, 2003), pp. 89-90, 94.
- (50) Michael H. Hunt, *Frontier Defense and the Open Door: Manchuria in Chinese-American Relations, 1895-1911* (New Haven, Ct., 1973), p. 30
- (51) Изяньев. Указ. соч. С. 114-115; Сампрелл, op. cit., pp. 168-169.
- (52) Москва, 10-го июня // Московские ведомости. 1900. 11 июня.
- (53) Schimmelfrensch van der Oude, op. cit., pp. 165, 202-203.
- (54) Китай для китайцев // Новое время. 1900. 11 июня.

- (55) Сунь. Указ. соч. С. 194-195.
- (56) Там же. С. 186-187.
- (57) Там же. С. 190-191.
- (58) Уштомский. Указ. соч. С. 69-70.
- (59) Там же. С. 75.
- (60) Там же. С. v.
- (61) Что нам нужно в Китае? // Новое время. 1900. 21 июля.
- (62) Суворин А. С. Маленькие письма // Новое время. 1900. 25 июля.
- (63) この日本のサウルターキーは現地にやるといふなかつた。Wimmel, op. cit., p. 108.
- (64) Суворин А. С. Маленькие письма // Новое время. 1900. 28 июля.
- (65) Сунь. Указ. соч. С. 197-198.
- (66) Суворин А. С. Маленькие письма // Новое время. 1900. 5 авг.
- (67) Суворин А. С. Маленькие письма // Новое время. 1900. 15 авг.
- (68) Суворин А. С. Маленькие письма // Новое время. 1900. 16 авг.
- (69) Martha Bohachevsky-Chomiak, *Sergei N. Trubetskoi: An Intellectual among the Intelligentsia in Pre-revolutionary Russia* (Belmont, Mass., 1976), p. 120.
- (70) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1900. Сент. С. 350-353.
- (71) Там же. С. 353-355. その脅威を取り除くためには清帝国を複数の独立国家に分割することも視野に入れる必要があるとされた (Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1901. Янв. С. 392)。
- (72) Москва, 4-го сентября // Московские ведомости. 1900. 5 сент.
- (73) Москва, 5-го сентября // Московские ведомости. 1900. 6 сент.
- (74) Москва, 6-го сентября // Московские ведомости. 1900. 7 сент.
- (75) Сунь. Указ. соч. С. 209.

- (76) Суворин А.С. Маленькие письма // Новое время. 1900. 2 сент.
 (77) Сунь. Указ. соч. С. 211-212.
 (78) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1900. Окт. С. 823-824; Дек. С. 803.
 (79) Там же. С. 804.
 (80) 和田‘前掲書’ 二六八—二六九頁。
 (81) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1900. Ноя. С. 391-392.
 (82) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1900. Дек. С. 805.
 (83) 『ヨーロッパ通報』はアメリカの態度を好意的に評価した。アメリカは速やかな平和回復を望む点でロシアと立場を同
 じへておられた。(Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1900. Дек. С. 804-806; 1901. Янв. С. 391)。
 (84) С.-Петербург, 8-го октября // Новое Время. 1900. 9 окт.
 (85) 和田‘前掲書’ 二六五—二六七、二九六—二七〇頁。
 (86) 前掲‘ 二七九—二八一、二八五—二八六頁。
 (87) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1901. Апр. С. 827.
 (88) Сунь. Указ. соч. С. 216-217.
 (89) С.-Петербург, 13-го января // Новое Время. 1901. 14 янв; С.-Петербург, 18-го марта // Новое Время. 1901. 19 марта.
 (90) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1900. Ноя. С. 394.
 (91) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1901. Апр. С. 826.
 (92) Там же, стр. 828-830.
 (93) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1901. Май. С. 380-381.
 (94) Там же. С. 382-384.
 (95) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1902. Март. С. 368-370.
 (96) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1902. Апр. С. 816.
 (97) Там же. С. 819.

- (86) Там же. С. 824.
- (89) 和田‘前掲書’四二六頁。
- (100) Иностранное обозрение // Вестник Европы. 1902. Май. С. 394.
- (101) Там же. С. 395-396.
- (102) クロポトキン陸相やブローヴェ内相は政治的計算もあつてヴィッテに反対した (Edward H. Judge, *Pelnye: Repression and Reform in Imperial Russia, 1902-1904* (Sytause, New York, 1983), pp. 153, 158)。
- (103) Суворин А.С. Маленькие письма // Новое время. 1903. 29 авг.
- (104) Ремнев А.В. Самодержавие и Сибирь: административная политика второй половины XIX-начала XX веков. Омск, 1997. С. 170. Динерштейн Е.А. А.С. Суворин: человек, сделавший карьеру. М., 1998. С. 295-296.
- (105) Карцов А.С. Русский консерватизм второй половины XIX - начала XX в. (князь В.П. Мещерский). СПб., 2004. С. 404, 409.